寮歌研究報告No.115】

『高寮歌解説書の落穂拾い』（その九十五）

詠帰会　森下達朗〈高同窓会会友〉

●『アムール川』の作曲者論争の検証（Ⅰ）

第11回紀念祭寮歌「アムール川の流血や」（明37）（以下、「アムール川」という）の曲調は軽快で歌いやすいことから、広く世間に受け入れられ、軍歌「歩兵の本領」や「メーデー歌」（聞け万国の労働者）などもこの旋律で歌われた。旧制中学の応援歌や校歌などに使われた例も多い。また一高内では「征露歌」（ウラルの彼方風荒れて）《青木得三作詞、明37》に採用され、『「アムール川」の譜』と記載されている。

作曲者が栗林宇一であるか永井建子であるかについては、長い論争の経緯があるが、平成21年10月2日の日本経済新聞朝刊の『文化往来』というコラムで、声楽家藍川由美氏の新たな見解が紹介されたことから、事態は新たな展開を見せた。この記事によると、藍川氏は、「アムール川」、「歩兵の本領」、「メーデー歌」の曲がすべて軍歌「小楠公」（明治32年刊行の永井建子著『鼓笛喇叭軍歌実用新譜』所載）を「本歌」としていることを突き止めたとされる。この記事が出た翌々日の10月4日には、Google の Wikipedia の関連項目の説明が一斉にこの記事に沿って修正されたこと、さらには、軍歌等に関するブログや書籍においても、大半がこの記事の内容に追従したことで、有力紙の記事の影響力を痛感させられた。

同書掲載の「小楠公」の譜は「アムール川」の譜とよく似ており、しかも二年先行しているので、藍川氏の説がかなりの説得力を持つことはたしかであろう。しかし、それを全面的に正しいとするにはまだいくつかの疑問点が残されていることを、筆者は詠帰会での研究発表や拙著『一高寮歌解説書の落穂拾い・増補新版』で指摘してきた。残念ながら、いまだ疑問点をじゅうぶん解明するには至っていないが、これまでに把握できた事項について、今後詠帰会の例会でアト・ランダムに報告してゆくこととしたい。

はじめに、この問題の発端となった日経新聞の記事およびそれを是とした GOOGLE の「ウィキペディア」、ブログ、軍歌関連書などの記述についておさらいしておこう。

◆日本経済新聞『文化往来』平成21年10月2日朝刊（全文）

旧制一高寮歌「アムール川の流血や」、軍歌「歩兵の本領」、メーデー歌「聞け万国の労働者」、さらに校歌のいくつかが同じ曲――。ソプラノ歌手の藍川由美は、それらの曲がすべて軍歌「小楠公」を「本歌」としていることを突き止めた。5日の東京文化会館のリサイタルで一度に歌う。

日本音楽著作権協議会は「アムール川（河）の流血や」は陸軍軍楽隊長を務めた永井建子と旧制一高生だった栗林宇一、「歩兵の本領」と「メーデー歌」とは栗林の作曲としてきた。藍川は大正11年（1922年）のメーデー歌から明治44年（11年）の「歩兵の本領」、明治34年の「アムール川の流血や」……と作曲年代を逆にたぐるうち、明治32年の永井の著作「鼓笛喇叭軍歌実用新譜」に載っている「小楠公」にたどり着いた。

「小楠公」の楽譜には「七五調に作りたる長編の軍歌にして未だ譜なきものには、この句節にして謡はしむる」と付記され、“ひな型”に歌詞を乗せれば、別の曲が作れると明記されているという。

茨城県立龍ヶ崎第一高校、岩手県立盛岡農業高校の校歌、石川県立金沢泉丘高校の応援歌も「小楠公」を下敷きにした形跡がある。「決まった旋律に様々な詞をのせて歌う和歌披講の伝統を感じる」と藍川は語る。

②

◆アムール川の流血や　出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』【抜粋、H30.3】

「アムール川の流血や」は、旧制第一高等学校（一高）の寮歌のひとつで、1901年（明治34年）に制作された。正式名称は「第11回紀念祭東寮寮歌」だが、冒頭の歌詞の一節から取られたタイトルで知られている。「嗚呼玉杯」とともに、一高の寮歌として広く知られた。

作詞は塩田環。作曲は栗林宇一とされ、作詞・作曲とも生徒の手で行われたとする点でも最初期の寮歌と言われてきたが、曲の原型は永井建子作曲の軍歌「小楠公」に求められる。同様の旋律で歌う歌には、軍歌「歩兵の本領」、労働歌「聞け万国の労働者」などがある。一高内では本曲の旋律を用いて「征露歌（ウラルの彼方）」が制作された。

曲の起源と派生

声楽家・歌唱史研究者の藍川由美は、1899年（明治32年）に出版された『鼓笛喇叭軍歌実用新譜』にある永井建子の「小楠公」が原曲であると指摘している。それより後の1901年（明治34年）に発表された「アムール川の流血や」を栗林の作とすることは困難である。

ただし、軍歌「歩兵の本領」、メーデー歌「聞け万国の労働者」が「小楠公」から譜をとってきたのか、あるいは一度「アムール川の流血や」を経由したものなのかはなお検討を要する。

当時は、学校の校歌や応援歌は「嗚呼玉杯調で」「アムール調で」とされることが多かったため、この旋律は一高の曲として解されて全国に広まったと推測される。一高内では「征露歌（ウラルの彼方）」に旋律が使われた。他にも大阪府立北野中学校（現・北野高校）の応援歌第一「澱江春の」や滋賀県立彦根中学校（現・彦根東高校）の応援歌などにも使用例がみられる。

◆歩兵の本領　出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』【抜粋、H30.3】

「歩兵の本領」は、1911年（明治44年）に発表された日本の軍歌。歩兵を謳った歌であるため歩兵の歌とも呼称される。作詞は当時の陸軍中央幼年学校（のちの陸軍予科士官学校）第10期生であった加藤明勝、作曲（原曲）は永井建子の軍歌『小楠公』の流用である。

原曲

『歩兵の本領』の原曲は、これまで1901年（明治34年）に製作された旧制第一高等学校の寮歌『アムール川の流血や』の流用とされていたが、実際の原曲はのちに陸軍戸山学校軍楽隊楽長となる永井建子が、1899年（明治32年）に出版した『鼓笛喇叭軍歌　実用新譜』内で発表されている軍歌『小楠公』である。この真実は2009年（平成21年）に声楽家兼研究家である藍川由美が発見した。同書の曲譜と歌詞には、「本曲譜は七五調にて作りたる長編の軍歌にして未だ曲なきものには此句節にて謡はしむるの作意なれば爰には小楠公の一編を藉り其名稱となす」との永井の但し書きが付いている。

この発見は、1944年（昭和19年）の『日本の軍歌』における堀内敬三の記述「『アムール河の流血や』の曲が永井建子の作曲であることは同樂長から私に寄せられた書翰で始めて知った」や、1992年（平成4年）の『向陵』に記載された「（『アムール河の流血や』の）作曲者栗林宇一氏は、軍歌など二、三の既成曲の組合せで作ったと語っておられる」とも合致する。これら本人の談話及び両曲の楽譜とその発表年は旧制一高生（中退）であった栗林宇一が、1901年（明治34年）の第十一回紀念祭寮歌で発表した『アムール川の流血や』は、1899年に発表された軍歌『小楠公』を借用した根拠となり得るが、『日本の唱歌（下）』（金田一春彦・安西愛子編。講談社）などにおける「この歌の作曲者は以前、陸軍軍楽隊隊長、永井建子と誤伝されていたが」との記述には根拠が示されていない。

上記二曲と原曲を共有する歌として、1922年（大正11年）に労働歌として製作（替え歌）された「メーデー歌」（聞け万国の労働者）が存在する。

◆メーデー歌　出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』　【抜粋、H30.3】

「メーデー歌」は、日本の労働歌。歌い出しから「聞け万国の労働者」とも呼ばれる。1922年の第三回メーデーで発表された歌で、作詞は大場勇。曲は既存の旋律を流用したもので、「アムール川の流血や」や「歩兵の本領」の替え歌である。これらの曲の原曲は永井建子作曲の軍歌「小楠公」にさかのぼる。

作詞者の大場勇は、当時池貝鉄工所の従業員・労働組合員であり、メーデーで歌うための行進唄として歌詞がつくられた。「アムール川の流血や」「歩兵の本領」で歌われていた旋律は、校歌や応援歌に流用されていたため全国的に有名であり、「インターナショナル」以上に広く知られた。

JASRACには、栗林宇一作曲として登録されている（栗林は「アムール川の流血や」の作曲者とされていた人物である）。旋律を同じくする「アムール川の流血や」と「歩兵の本領」は栗林宇一作曲、永井建子作曲の両方で登録されるという矛盾がある。「アムール川の流血や」「歩兵の本領」の元歌は永井建子が1899年に出版した軍歌「小楠公」である。

◆二木紘三のうた物語　（ブログ）　【抜粋、H30.3】

「歩兵の本領」の作曲者については、陸軍軍楽隊の楽長・永井建子か、旧制第一高等学校の学生で、同校の寮歌『アムール川の流血や』の作曲者とされる栗林宇一かで長い間紛糾してきましたが、遺族同士の話し合いによって、栗林宇一作曲ということで一度は決着しました（『読売新聞』昭和51年〈1976〉5月1日号による）。

しかし、平成21年（2009）、声楽家の藍川由美の調査により、永井建子が明治32年（1899）に出版した『鼓笛喇叭軍歌実用新譜』に掲載された『小楠公』が原曲であると判明しました。

『アムール河の流血や』が、旧制一高の第11回記念祭寮歌として発表されたのが明治34年（1901）2月であるということからも、永井建子作曲説の正当性がわかります。

◆『戦争が遺した歌』（長田暁二、全音楽譜出版社 2015）　【抜粋】

「アムール川の流血や」――作曲者は栗林宇一説が長らく有力だったが、最近この定説をソプラノ歌手の藍川由美が覆した。彼女は「アムール川の流血や」が出る2年前に作られた軍歌集に、陸軍軍楽隊隊長永井建子作曲の軍歌「小楠公」が掲っているのを見付け、これが「アムール川の流血や」と4分の3が同じだと喝破した。「小楠公」の楽譜には、「七五調であれば、別の歌詞でも使える」旨が記されていたと報じた。当時は音楽著作権意識が希薄でおおらかな時代だったので、著作権を主張して争う事はなかったらしい（「歩兵の本領」参照のこと）。

「歩兵の本領（歩兵の歌）」――「歩兵の本領」は戦中の「軍歌集」では永井建子作曲となっていた。そのため他の曲集には、栗林宇一作曲と永井建子作曲の2説があった。昭和51年（１９７６）５月１日の読売新聞の記事に拠ると「栗林氏の遺族落合百合子さん、永井氏の遺族永井邑さんが話し合った結果、栗林宇一さんの曲であることが確認された」とある。筆者はこの遺族の話合いを尊重し、栗林宇一作曲説を採ってきた。ところが平成2年10月24日付の読売新聞に拠ると、日本の唱歌を研究しているソプラノ歌手の藍川由美がこの定説を覆している。音楽著作権は作者の死後50年で消滅するため、これでどうこうという争いは起きないが…。今後は彼女の研究結果を尊重したいと思う（「アムール川の流血や」の項参照の事）。　《⬆森下注：藍川由美の記事の掲載紙名と掲載日は誤り。》

●「アムール川」と「歩兵の歌」との関係についての検証

「歩兵の本領（歩兵の歌）」は、陸軍中央幼年学校第十期生の加藤明勝が作詞し明治44年の百年祭で発表したものだが、同校第十期生の『百日祭』と題する歌集（南部直樹氏所蔵の稀覯本）に収録された43曲の内容を検証してみたところ、一高寮歌からの借譜によることが明記してあるものが26曲にも及ぶことが判明した。

その内訳は、「玉杯」7曲、「緑もぞ濃き」7曲（うち4曲は陸軍中央幼年学校第五期の「西豺狼」の譜＝「緑もぞ濃き」の譜からの借譜）、「都の空に」、「波は逆巻き」および「あゝ混沌の」各1曲のほか、「アムール川（河）の譜」と明記されているものが「歩兵の歌」を含めて9曲に及ぶ。

以下、「アムール川」の譜からとされている9曲の第1節の歌詞のみを列挙してみよう。

①「十期磐壽」――「隙行く駒の足早み　流るゝ水の絶間なく
年の小車めぐり來て　我等は迎ふ百日祭」

②「歩兵の歌」――「萬朶の櫻か衿の色　花は隅田（ママ）にあらし吹く
大和おのこと生れなば　散兵線の花と散れ」

③「兵科の歌」――「嗚呼紅の襟章に　輝く星を光らせて
未來のゲネラル夢みつゝ　バタツク我に望あり」

④「暫しの別れ」――「光のどけき春の日に　春を奏づる鳥の歌
自然の樂譜ひらきては　希望の光あふるゝを」

⑤「騎兵の歌」――「騎兵志願の其の人よ　伊達の眼鏡は六十度
腰には錆びたグルメット　萌黄もおかしスタの色」

⑥「野砲兵科」――「衿には黄菊目に眼鏡　具者長股（ぐしやなが）までは喜込みて
重學解析持って來い　朝飯前の一仕事」

⑦「重砲兵」――「山吹色は同じでも　鐵砲擔いでバタ〳〵と
貧乏徳利横にした　衿に榮あるもぐらもち」

⑧「工兵の歌」――「工兵志願の剛の者　足の長さは二寸五分
顔の色はセピアとか　どこから見ても土方然」

⑨「交通兵」――「シグナル急に下っては　どこをおすやら引くのやら
機關車内で大騒ぎ　それでも汽車は止まらない」

いずれも1節が4行からなっており、永井建子の作とされる「小楠公」のように1節が6行のものは見当たらない。「百日祭」とは予科の卒業予定日の百日前に兵科（兵種）や原隊（配属任地）が決まるのを記念して開かれた伝統的な行事で、旧制高校寮の紀念祭に近い性格を持ち、百年祭の折に作られた歌には、右に見るように寮歌の譜を借用したものが多かった。以上のことからみても、原曲がどこまで遡られるかという問題は別として、「歩兵の本領（歩兵の歌）」はあくまで一高の「アムール川」の替え歌として作られたものであり、永井の「小楠公」の流用であるという説や永井自身が改めて作曲したという説が当たらないことは明白であろう。

以上

（平成三十年三月）

④